



ROTARIANS
UNITED IN SERVICE
DEDICATED TO PEACE

ロータリアン
奉仕に結束
平和に献身



会長 吉野 勲 幹事 板垣広志 クラブ奉仕 高橋良士 職業奉仕 飯野準治 社会奉仕 佐藤元伸 国際奉仕 阿蘇司朗 青少年奉仕 菅原辰吉

出席報告：会員 80 名 出席 48 名 出席率 73.85 % 前回出席率 72.38 % 修正出席 58 名 確定出席率 89.23 %

会 長 報 告

吉野 勲 君

1. 今週は別に報告事項はございませんが、去る24日、私たちクラブのスポンサークラブであります山形西R.C創立30周年記念式典に多数の会員が出席して頂きご苦勞様でございました。私も出席の予定でございましたが、一寸体調を悪くし失礼させて頂きました。おかげ様で治りました。尚、後程若生団長さんからご報告を願いたいと存じます。
2. 元会員の菅原実純氏が10月26日朝、亡くなられました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

幹 事 報 告

板垣広志君

1. 酒田東R.Cより10月29日の例会は第5回クラブ協議会のため、午後5時、酒田産業会館、登録料は3,000円です。
2. 八幡R.C場所変更
職場訪問のため八幡電子(株)
(分区代理の事業所)
3. 吉田ガバナーノ ミニーの事務所開設の案内
10月17日開設 詳細は事務局まで
4. 例会変更 11月3日は祭日につき休会
月始めの理事会も10日に延期
5. 新会員の推薦に関する氏名発表
3名(省略)
反対の方は理事会まで書面で送付下さい。

山形西R.C 30周年記念式典へ参加して

若生恒吉君

10月24日、山形市ホテルオーヌマにおいて厳粛な

中にも和やかに行なわれました。

当クラブの親クラブでもあったので敬意を表し、三井徹先生御夫妻、山口直前会長、板垣幹事、市川会長エレクト、山本順一・阿蘇両理事、佐々木喆彦・中江亮両委員長と私の10人が参加して来ました。

志藤ガバナー初め県知事代理、金沢山形市長、清野会議所会頭等多数の来賓他、高知、金沢、姉妹クラブ等 300 人位の参加人数でした。

チャーターメンバー 4 名と歴代会長への記念品と花束の贈呈があり、スライドによる30年の歩みが紹介されました。

記念事業としては、西ロータリーの歌発表、地元出身の彫刻家佐藤助雄氏のブロンズ像、題名「燭」を山形中央公園美術館前に山形市へ贈呈、30周年記念誌の刊行と式典の4つの記念事業が発表されました。記念講演は地元郷土史家武田好吉先生の「最上義光と伊達政宗」のお話があり、記念祝賀会もホテルオーヌマのロイヤルルームで、地元蔵王ワインから開会され、藤井テルコのシャンソンでおいしい酒を戴いてきました。

鶴岡に着いたのが9時50分になり、そのまま帰宅となりました。鶴岡も来年度は30周年の記念の年でもあり、大変勉強になりました。記念品は紅白のモチと山形名物、茂吉と蔵王オカマの鋳物の文鎮でありました。

★ 山形西ロータリー、パンフレット資料より30周年記念事業のあらまし

1. 西ロータリーの歌発表
1986年4月21日 発表祝賀会

山形西ロータリークラブの歌

「蔵王を仰ぐ」

五十嵐康祐 作詞
服部 公一 作曲

1. 蔵王を仰ぐ ふるさに
情熱あふれ 意気高く
奉仕の理想に 燃える友
手に手をつなぎ いぎ共に
ああ われら 山形西ロータリー
2. 霞城のほとり 空高く
希望の旗を ひるがえし
出会い嬉しく 睦む友
好意と友情 いぎ共に
ああ われら 山形西ロータリー

2. 記念事業「燭」の贈呈

1987年4月20日 除幕式・祝賀会

3. 30周年記念式典の挙行

1987年10月24日

4. 30年記念誌の刊行

1987年12月末日

— これまでの記念事業のあゆみ —

10周年記念事業 「乙女の像」

20周年記念事業 「光明の庭」

30周年記念事業 「燭」

中央公園に設置

会員スピーチ

癌 の 告 知

高 橋 良 士 君

現在、日本人の死亡原因の第1位はガンであり、昨年は191,602名が死亡している。私共の住んでいる鶴岡保健所管内では325名がガンで昨年死亡しており、死亡者の4人に1人が「ガン」で死亡した事になる。

「ガン」ははたして不治の病であるかという、皆様方も御承知の様に不治の病ではない。ちなみに国立ガンセンターの統計によると、60年当初国立ガンセンターを訪れたガン患者の5年生存率は37%であったのに、最近では何んと52%に上昇している。こうした背景のもとに、そろそろ「ガンの告知」という問題を「倫理」や「情緒」としてでなく、「科学」と「法律」として考えた方が合理的ではないだろうか。ガンである事を告知しない方が本当に医学的に治療効果が高いのかという事、患者にガンという病名を知らせない権利が果して医者にあるのかという視点から考えてみることにする。

まず始めに、「ガンの告知」という言葉は死の宣告とも受けとめられる表現かと思われるが、しかし実際には、最近では「ガン」は不治の病ではなくなりつつある。医学的に5年生存率が急速に高くなっている。5年生存率とはガンの場合、他の臓器への

転移や更に再発という問題があるので、治療後5年間ガンで死亡しない時に始めて治ったとみなす。従って5年間生きるという事がガンが治ったか治らなかったかという物差しになるわけである。例えば早期にガンを発見した場合、胃ガンの5年生存率は98%、大腸ガン80%、子宮ガン88%、直腸ガン79%、他のガンも早期ガンならほとんど治るし、他の病気と比較しても決して治ゆ率は低くないと考えていいであろう。すでに申し上げた国立ガンセンターの統計は末期ガンを含めての平均値で、つまりガンは半分の人が治ると考えていい時期に来ているわけである。

さて、「ガン」を知らせて欲しいかどうかを或る新聞が世論調査を行ったデーター（本年5月）に依ると、ガンを知らせて欲しいが64%、知らせてほしくないが27%である。医者を対象に行った本年8月のアンケートでは、医者が患者の立場になったときガンを知りたいが83%と多いのに、医者として患者に知らせる53%、知らせるのに反対が45%という事であった。つまり医者も患者の立場になると教えて欲しいという事になるのである。

ここで大変重要なことは、ガンは知らせた方が治

り易いという事実である。これは医学的なデータで証明されているが、要約すると、知らせた方が患者の協力が得られる、即ち患者ははっきり知った方がためらわず納得して早く治療を受ける場合が多い。再発した場合でも本人が一早く気付いてくれる場合が多い事などが大きな要因と考えられる。いろいろなアンケートをみても、医者がいかにガンを患者にかくしても、90%は死の一ヶ月前には気がついている様である。

日本人はよく、長い間苦しむよりはポックリ死にたいという願望があるが、本年は特に大企業のトップがSudden death (突然死)で相次いで死亡している。心筋梗塞である。

アメリカ人の場合は、一番怖がるのは心筋梗塞である。この病気はまさにポックリいくのである。アメリカ人がこの死を怖れるのは、彼等の社会には遺言をはじめとしていろいろの制度があり、自分の死後のことをキチンと整理してから死にたいと思っている。ところが、心筋梗塞ではそれが許されない。

しかし、ガンなら普通数年、どんなに短かくとも数ヶ月という命は保証されている。その残された時間に自分の死後のこと、家族のことを考えて整理することが可能である。

現実には日本の医者はほとんどガンについて教えてくれない。ガンでないか否かを悩み続けて疲れ切っている人、或はもしも自分が「ガン」なら書いておきたいもの、会社や財産を整理しておかなければならない人もいるであろう。実族や会社の部下だけがガンと知り、本人が知らされなければ、極端な場合のっとりも可能となるわけである。

ところで肝心の、ガンを知らせるか否かの問題であるが、戦前からの日本の医者との関係は、ガンの告知のみならず極端には「知らしむべからず寄らしむべし」の傾向にあったが、現在でも何しろ「医者からもらった薬がわかる本」がベストセラーになるぐらいであるから全くなさけない話である。アメリカの統計ではガンを知らされてから自殺を計った患者は予想以上に少く、むしろガンではないのに「ガン」ではないかと思って自殺する人が時々新

聞に出ているが、ガンをはっきり知らせる時代が来たらこういう事もなくなってくるであろう。

患者ときちんとした人間関係を保って信頼関係があれば、きっとガンを告知しても大丈夫なはずである。ただ、我国でガンを告知したあとに不安が残るのは、早期癌はともかくとして、末期癌患者に知らせたあとのサポートに自信がないからである。最も重要なこの問題に関しては、アメリカにはガン患者が安らかに死を迎えるために心理的、宗教的に援助する医療施設(ホスピス)がある。即ちガンを告知しても、告知された患者の心の苦しみに対処出来るシステムがしっかり整っているのである。

しかし、日本では仏教、キリスト教のホスピスがまだ数ヶ所のみである。この施設では、いよいよ医学では救えないとわかった時、何をもって患者にアプローチするのか、患者に与えるものは医学にはない。死は科学、医学の終りなのである。それをなお医学で対応するのは実におろかしいことなのである。ホスピスでは「この様なとき、まずあなただけが死んでゆくのではないですよ、世界中の人がみんな死ぬですよ。元気な者が弱者に告げるのではなくて、私も死ぬですよ」と、同じ土俵の上で話をしているそうである。自分がガンだと知ってしまうと、明るくなり、はるかに時間を大切にす。もちろん告知後どんな人でも落ちこむが、4~5日の間に自殺をしなければ、まず立派に立ち上っている。90%以上の方がアンケートでガンを告知されて良かったと言っている。肉体は一時的に死ぬが、「又、会える」と説すことが家族にも、患者にも慰めになっているという。そして、最後に皆んなに感謝してなくなってゆく。

フリーライターの千葉敦子さんがニューヨークで乳ガンと闘いながら執筆した闘病記の冒頭の一節「よく死ぬことはよく生きることだ」に書かれた中に、「ひとつの文化の高さを計る尺度はいろいろあると思うが、国民が豊かな気持ちを抱いて死ぬる社会が建設出来れば、その文化は非常に高い水準にあるといえるのではなかろうか、心豊かに死ぬる社会というのはどんな難病にかかっても病気が人生をぶ

ちこわしにしない社会でもあるはずだ。どんな重い障害を負った人でも、生き甲斐をもてる社会でもある。」を引用して本日のスピーチの結びにしたい。

スマイル

杉澤保吉君 1月1日より電気料金が値下げになります。営業用22%、電灯用12%です。値下げにより地域社会に奉仕出来ればとスマイル致します。

ビクター

鶴岡西R.C 佐藤 擴君・斎藤健治君

鱒 サケの季節

月光川は鳥海山の南山麓を流れる川で、鳥海山の幾条もの谷川を合わせて流れてくる。この月光川水系には、すぐ山麓に箕輪のサケふ化場があるし、少し離れて、升川ふ化場がある。この中、箕輪のふ化場が、設備も採卵数も大きく、山形県で最高なだけでなく、日本海沿岸の河川のふ化場の中で最大である。サケの採捕数も23,000余尾に達している。

箕輪のふ化場は、鳥海山麓の莫大な量の湧水を取り入れているが、この地の利も大いにあると思う。しかし、箕輪ふ化場も、昔から、こんなに多くのサケが溯上してくる川ではなかったそうである。徳川時代の中ごろは、たぶんかなり多く溯ったのかもしれないが、文化3年(1806年)ごろになると少なくなったらしく、今まで、鶴岡の酒井藩に納めていたサケを、これ以上減らさないように、箕輪のある牛渡川などを、種川として保護するように命じられたと記録にあるそうである。当時は、もちろん、自然産卵するのを保護したものであろう。

月光川水系で、人工ふ化事業を行なうようになったのは、明治41年(71年前)で、(中略)当時は、年20尾くらいしか捕れなかったのが、10年後には、100尾も捕れるようになった。そして30年後は1,000

尾あまりになり、昭和39年、すなわち、50数年後に、10,000尾あまりに達した。

(中略)

サケは、ご承知のように、母川回帰をする。きれいな水が流れている川なら、サケはどの川に溯ってもよさそうなものであるが、必ず故郷の川にのぼる。母川回帰を確かめる実験は、アメリカでも、カナダでも、大々的に行なっているが、100尾中100尾とも、間違いなく故郷の川にのぼった。ただ、実験的に、鼻孔に脱脂綿を詰めて放すと、こんどは、川の流れるところなら、どの川でものぼって行く。これから見ると、鼻というのが、母川を見分ける感覚器だということがわかる。つまり、嗅覚が、ものをいうのである。

サケが、ほんとに故郷の川の水を、嗅ぎ分けることができるかどうか、実験されている。場所は、アメリカのシアトルで、当時、ワシントン大学の動物学教室で研究していた原俊昭氏は、上田氏とゴープマン氏と共同で、サケの嗅覚の実験を行なった。まだ海に来たばかりで、川に溯らないサケを捕え、大きな水槽に入れる。それから、脳を手術して、脳波測定装置につなぎ、脳波に変化が起これば、すぐ、解るようにする。そして、この水槽に、蒸溜水、他の川の水、故郷の川の水を、それぞれ、流しこむと、故郷の川の水を流した場合は、はっきりと、脳波が興奮したことを示すようになった。故郷の川の水をはっきり区別できるのである。(後略)

阿部 襄氏(会員56年4月死亡)

“庄内の四季”より抽録

